# 会　議　録

件　名：第１回「大隅地域おける県立垂水高等学校の在り方に関する地区検討会」
（略称：垂水地区検討会）
日　時：平成23年６月28日（火）午後３時30分～５時10分
場　所：垂水市民館　第１研修室（市民館２階）
出席者：尾脇委員長・肥後副委員長・宮迫委員・北方委員・中川原委員・寺地委員・有馬（勝）委員
今井委員・坂元委員・池田委員・山田委員・有馬（修）委員・田ノ上委員・伊集院委員
橋口委員・池之上委員
※欠席：堀之内委員・岩元委員・八木委員・川井田委員・川畑委員
（オブザーバー）濱田垂水高校校長
鹿児島県教育庁高校教育課　３名・大隅教育事務所　２名
（事務局・その他出席者）企画課長・課長補佐兼計画調整係長・計画調整係主査
教育総務課主幹兼庶務係長
企画課地域政策係主事補・事務補助職員
（傍聴等）大隅地区検討委員会　染川委員・南日本新聞・ＭＢＣ・西日本新聞

■開会：企画課長
（要旨）
・資料の確認、委員の紹介（県教育委員会、大隅教育事務所からの出席者含む）
・垂水市の地域活性化やまちづくりに欠かせない垂水高校の振興対策を話し合う大事な会であること。
・会議の公開について、同意を求めたこと。（以後も同様の取り扱いとすること）

■市長あいさつ
（要旨）
・垂水高校は本市のとってなくてはならないものであり、市行政においても最重要、最優先の課題として取り組んでいること。
・現在の取り組み状況であるが、「魅力ある垂水高校づくり」振興支援策の骨子案をまとめ、パブリックコメントなどを行い広く市民の意見やアイデア募集を行っている段階であること。
・県においては、今後少子化による生徒数減少を見込み、高等学校の在り方について、大隅地域の高校の充実や地域振興の視点を加え検討していくこととしており、６月２日に大隅地域の公立高校の足り方検討委員会を設置したこと。
・同委員会から、垂水市における垂水高校のあり方を検討し、振興支援策等を提案することを求められており、今回この垂水地区検討会で検討することとなったこと。
・垂水地区検討会は、今後の垂水高校の存続、振興に関わる垂水市なりの考え方をまとめていく重要な会であり、なお、今回は垂水市の取り組み状況の説明が主となること。
・次回以降の検討会で審議を通じて内容を深めていきたいと考えていること。

■議事
※企画課長：議事の進行は、本会設置要綱の規定により、尾脇委員長が行う。

〇議長：会の終了は午後５時の予定。皆様方のご協力をお願いしたい。
　　ではまず事務局から本会の概要を説明ください。

●事務局：（説明要旨）
・県教委からの説明を含め、地区検討会の役割についてご理解いただきたいこと。
・本日の協議内容（協議題の読み上げ）
・垂水高校の存続振興対策事業は、同高の「在り方」提案の裏付けとなる大切なものであり、８月までに報告書をとりまとめ、改めて皆様のご理解とご協力をいただく予定であること。
・今回は、垂水高校の振興策の素案をまとめるまでの取り組みの考えについて説明し、次回以降の会で「垂水高校の在り方」の具体的な内容について協議いただきたいこと。

〇議長：これより協議題にそって進めていきたい。
　　「議題１　大隅地域の公立高校のあり方検討委員会設立の経緯と地区検討委員会の位置づけ役割などについて」県教育委員会から説明をいただきたい。

●県教育委員会（県教委高校教育課　）：（説明要旨）
・垂水高校については、地元の皆さんが、熱い気持ちで存続に向けていろんなアイデアを出して頂いており、市全体で取り組んでいるという認識でいること。
・将来的に子供の数は減っていく中で、これまで県教委は高校教育の水準の維持、確保ということで、県内各地、再編統合ということでやってきたが、今後、地元の方々と協議を重ねる中で、地域の振興という視点を加えた中で検討していくということになったこと。
・地域振興という視点であるが、地域の振興につながる垂水高校の在り方、活性化として一体どういうものが考えられるのか、あるいは垂水の地域性、地域での特性がどう垂水高校の魅力へとつながっていくのか検討されていること。
※以後、資料「大隅地域の公立高校の在り方検討委員会　地区検討会資料（垂水地区）」で説明
・地区検討会設置依頼までの大まかな流れであるが、平成 21 年３月、鹿児島県公立高校の再編整理計画検討委員会が設置され、昨年３月答申が出された。それをもとに昨年 10 月、公立高校の振興方針骨子（案）を発表したが、骨子案の中にある廃止基準に関して様々な意見があり、また同時に地域間格差が伊藤県政の１つの課題としてクローズアップされてきたことから、特にこの大隅地域においては、地元の皆様と十分に協議を重ねた上で高校の在り方を考えていくということになった。
・６月２日に第１回の「大隅地域の公立高校の在り方検討委員会」を開催。また、大隅地域を７つのブロックに分け、地区検討会の設置を依頼した。この２つの会がお互いフィードバックする形で意見のやり取りをしながら、来年３月に大隅地域全体のとりまとめを行う。
・垂水高校の現状について、在籍状況、定員及び充足率、学科の特徴、部活動の状況、教職員数、通学方法、卒業後の進路、垂水市内の中学生の進路状況を説明。
・教員数の補足として、法律上は 15 名であるが、少人数の場合は加配ができ、同校は現在 19 名が常勤で配置されている。しかし、小規模校の厳しい部分があり、例えば、日本史、世界史、地理などの科目の中で世界史の専門の教師が一人配置されているのみで、規模が大きい学校と比べると、教科の選択が限られる。生徒が減る中で教員数もさらに減っていくことが予想される中、専門性の確保ということが一つの課題である。
・地元への就職は 27 人中 12 人で、地元企業への就職はもちろん、一旦離れても地元に帰ってくる若者が生活基盤を得られるような方策を出してほしい。
・垂水市内の中学生の状況であるが、垂水高校に入学した生徒の７～８割が垂水市内の生徒。残りの２割弱が鹿屋市から、１割弱が鹿児島市からの生徒である。
・学科の選択状況は、普通科希望がいちばん多く、57.4％。半分以上が普通科希望。続いて、家庭科、工業科、看護福祉の順番。３年間だけでも変化があり、普通科、商業科の希望は若干減っている。一方で家庭科、看護福祉科を志望している３年生が増えている。

・中学卒業後の進学先の高校は、過去 3 か年の平均で、垂水高校が 24.8％、垂水中央中の 4 人に 1 人が垂水高校に進学している。残り 40％が鹿屋市内を中心とした大隅地区の他の学校に進学、約 20％が鹿児島学区の学校へ進学している。市内から抜けていく状況をどうとらえていくのかというのがポイント。中学生の希望が普通科 57.4％、家庭科が 12％とあり、合わせると 70％くらいになるが、実際生徒は 25％しかいない。残りの 45％の普通科、家庭科希望の生徒をいかに呼び寄せるかがポイントになる。
・垂水高校の自立振興について、高校生はもちろん、小中学生あるいはその保護者にどういったニーズがあるのか気になる。地域から支持され、魅力ある高校づくりというために具体的な声を出していただきたい。
・大隅地域の今後 9 年間の生徒数の推移であるが、今年 3 月の中学校卒業生は 141 人、来年は 144 人、現在の小学校 1 年生が中 3 になると 105 人と生徒減少が予測される。単純な計算はよくないが現在の進学率 25％では生徒数が 25 人程度になり、学級数や在籍者数ともに厳しい状況が予測される現状である。生徒減少は垂水地区だけでなく、大隅地区全体、あるいは鹿児島県、あるいは全国的な傾向であり、他の地域も減少している中他の地域からどうやって生徒を集めるのかという厳しい部分がある。市から出ていくのを防ぐ対策と外から取り込むかということもあわせて考えてほしい。
・教育環境の充実、活性化のために地域がどう支援して頂けるのか、というのも今回地域振興という視点を入れさせていただいた一つである。意見をたくさん出していただきたい。

〇議長：県教育委員会の皆様には次回以降もご出席いただき、今後ともご指導いただきたいと考えている。ここで質問があればお受けしたい。

〇宮迫委員：6 ページの図。垂水はちょうど真ん中、一番南の近い高校は鹿屋女子高、北の方は国分高校。垂水高校がなくなれば県教委にはどんな問題があるのか。

●県教委：もし垂水高校がなくなれば、高校進学を希望する生徒は、引っ越さないかぎりは、垂水から合格した高校に通学しなければならない。それで県教委が困るかというと、なかなか難しい所であるが、できるならばそうならないように、地元の皆さんもご意見を上げていただけたらと思う。

〇　委員：県教委が垂高をなくしたら、この長い通学距離になる。なくさないためにどうするかという会のはず。僕らに投げやりじゃなく、こういう方法があると、そこをみんなでギアを合わせていかないといけない。

●県教委：おっしゃるとおりギアを合わせていくということはとても大事。従来の整理統合基準であれば生徒数が減るとその先には廃校というような形も見えてくる。ところが地域振興という点からいうと、それはいかがなものかということで、今回地元から何とかして存続をということが出る。しかし今のままではなかなか難しい所があるので県教委とどう協力していくか。もちろん県立高校だから県が責任もってやる部分もある。そこに地元の生徒が通っているということで、県教委の意見だけではないということ。まずは具体的に実現可能なもの、仕組みがどうやったら形づくれるかとお聞きしたうえで、大隅地区全体の会の場で我々の意見も出させていただきたい。

〇　委員：過去に私は垂水であった「知事と語る会」で垂水高校に看護福祉科をつくって下さいとお願いしたが、お金がありませんという回答でした。そういうのはまたこういう会で言えるのか。県立の看護福祉系の科は、野田女子高、奄美にあるが大隅半島は無い。しかも、男子の通える学校は無い。一番近いのは加治木で時間的にもお金もかかる。大隅にあれば外からでも子供が来るのではないか。もう一つは鹿児島の方は県もお金を新幹線などに

1,300億円ぐらい使っているが大隅には使ってない。そういう意味でもなんかできないか。

●県教委：この会は地元の皆さんの意見を出していただく会だと思っており、会の中で意見の取りまとめをしてほしい。

○　委員：鹿児島の郡山にある甲陵高校が来年の３月で校名が消える。そのあとに明桜館高校があるが、なんで同じ高校に校名が２つあるのか。

●県教委：明桜館は鹿児島地区の再編統合という形で鹿児島西高校と甲陵高校、２つを一緒にした。新しい高校は甲陵高校の敷地と建物を使うことになっている。今、明桜館高校が２年生まで生徒、甲陵高校は最後の３年生が同居している状態。２、３の学校をどこかの学校の建物や敷地を使って統合すると、こういうダブリが必ず生じてくる。

○議長：それでは次に議題２「垂水市における垂水高校存続対策事業」について事務局より説明をよろしくお願いいたします。

●事務局：※垂水高校存続対策の全体の状況、アンケート調査、骨子案等について説明

○議長：事務局はゴールデンウィークを返上して現場に足を運びアンケートを取るなど、基礎的な内容の濃い資料を作ってもらった。何かご質問はないか。

○委員：とくになし。

○議長：次に議題３「第２回垂水地区検討委員会」以降の取り組み、内容について事務局より説明ください。

●事務局：※「第２回地区検討会」以降の取り組みについて説明

○議長：事務局説明のとおり、より詳しい内容は次回の会で審議いただく予定。今の段階で何かご質問等がないか。

○　委員：部活動はイメージアップという一つの方法として考えられないのか。

●事務局：委員が言われた案は、市民の皆様からもいただいている。確かに子供が少ないが、いろんな知恵もある。実際民間からの指導の方も一生懸命されている。実は先日あった「語る会」でも、こういう方がいるといった情報があった。生徒は少人数であるが部活動をどう盛り上げていくかという視点は今後取り入れていきたい。

○　委員：私は実際に子供４人を垂高に通わせた。18歳までは親の目の届く地元で子どもは育つべきだという気持ちがあった。しかし、垂高に行くといった場合、中学校から「えっ垂高でいいの」というような指導も受けてしまう。自分たちはここに残るのがあたりまえであると、逆に出たいという子どもたちに対して、親の方から「頼むから18歳まではここにいてくれ」と頼んで垂高にやっているという状況もある。こういう会が活発に行われるということはすごくいいことであるが、できたらあと５年早くやるべきであった。今２クラスになり、先ほど言われた部活でイメージアップしろと言ってもなかなか難しい所がある。子供たちにとっては勝つことよりも、仲間意識をつくっているので充実しているとのこと。何が魅力的かはそれぞれの所の考え方で違うと思う。この進学先の問題は個人的な問題であって行政等が踏み込めない。垂高は残してくれと言うことは簡単。ではあなたはどうな

のかと聞いたとき、そこに自分はいない。私にとってはどうなのか、実際、垂高を残して垂水をどうしたいのかという視点まではなかなか踏み込めない。それをこうやって行政が立ち入って、はたしてどこまで実施してくれるのか不安がある。「魅力ある垂水高校」とあるが今通っている子供たちは魅力があるというふうに思ってもらえないのか、一生懸命やっている自分たちはなんなのかなという声も聞こえる。親や行政の方達が子供たちにどのくらいそれを訴えて残るように説得できるか。こういうふうに魅力があって活発だというのは、それなりの人数が来て活動して初めてで出くるイメージである。垂高は頑張っている、じゃあ行こうか、となったらよいが、今は最低ラインの所。残すためにだったら、それなりの親や行政が覚悟をして、どうしても「垂高に残ってくれ」と子供達に訴える事、中学校の進路の先生たちも「地元であること」をしっかり言ってもらいたい。存続するための働きかけが行政の義務であって、イメージや方針は大切であるが、最初のベースの所では、垂水には垂高が必要だから自分の子は行ってくれるようにするなど親が気持ちを変えてほしい。

○　委員：垂水には中学校が１校、高校が１校ある。県下には中高一貫校が与論と喜界にあるようだが、中高一貫校にする際には地域の要望があって県教委は承認されているのか、今、実際にそういう教育が実施されていてどうなのか、困っているところはないのか教えていただきたい。

●県教委：中高一貫校は、平成 12 年に与論、平成 151 年に喜界にできた。これはもちろん地元の要望等もあったが、それによって教育効果が高いということが考えられた。制度上の問題として、中高一貫校の場合は中学校を卒業した子供さんの７、８割が高等部に進学をするということが見込める状況が必要である。現在、垂水中央中と垂水高校が中高一貫校となると、それ以外の選択をする子どもさんのための中学校をもう一つは作っておかなければいけないと思われる。これは法律上の定めであるのでこのような問題をクリアしておく必要がある。

○　委員：垂高が存続はこの地域にとっては必要だろうと思っている。そのためには、今の垂高の現状でいいのかということもある。25％しか行かない現実、75％が垂高以外に行くという現実も検討しないといけない。確かに小規模でいいかもしれないが、他の子供達は適正規模なところで切磋琢磨して、勉強をやりたいと、部活動をやりたいという子どもたちもいるかもしれない。そういうところも含めて、もう一回検討委員会で、垂高の存続もはかりながら、なんで行かないのかというところを、逆の視点から考えていって欲しい。そしてまた行政が、進学は個人の問題だと言われたが、全くその通りだと思う。進路にあたっては行政も多分踏み込めないだろう。ただ、ここはいいですよということは言えるし、振興策をするのはいいが、今の中学生たちに進路の選択の自由を奪うようなことはやめてほしい。それだけは言っておきたい。

○　委員：私は地元出身でよそにいたが帰ってきて 10 年位経つ。垂高の存続についていつからこの問題が始まったのか。今まで検討されているはずなのに、進んでいるのか、進んでいないのか。実際、何が問題なのか、そこら辺の積み重ねがあってしかるべきではないのかと思うが事務局の認識はどうか。いつからこの問題は始まったのか。看板を設置したりしたが今作った問題ではないと思う。

●事務局：先ほど、協議をいただいた振興対策協議会は教育委員会が事務局となって、皆さんにお集まりいただいて垂水高校の振興と支援をしていく会で平成９年に設置された。今まで皆さんもご存じのように、地元の垂水高校に行こうと看板を立てたり、チラシを作成して、中学校に配ったりとしている。先ほどの、魅力がないのかということにもつながるが、決してそういうつもりはない。今までの積み重ねはしてきたが、でも確かに少子化とはいえ入学者が

減っている。もちろん池之上委員がおっしゃたように子供達の進路を充分に尊重しながらも、どういうふうに垂水高校を振興していくのかと、やはりこの視点は〇〇〇をしていきながら、進めさせていただきたい。

〇　委員：過去、垂水高校に矢神校長がいて礼儀も正しくなった。今も茶髪もいなくなり非常に素晴らしい。もう一つ、鹿屋高校に行った女の子が、垂水高校から彼女が出た県立短大か鹿女短に進学し、こういう方法もあったのかと話していた。ということは、朝も早く行って男子と一緒に勉強しながらですね、先生も言うんです、朝飯を食べて来たか来なかったかと、お母さんがパンでも買えといったらそれもまた怒られたそうです。垂水高校を出ればそういうこともない。上から何番目かにいたらそういう学校の推薦もできると思う。大学というのはものを考える場所。だから３年間どこでどういう過ごし方をするか。それが今の垂水高校にはできるのではないか。さっき言われたように、家の近くにあれば朝早くにおきて家族を犠牲にして、犠牲と言ったら、まあ家族がどう理解するかですけど、それが彼女にとって良かったのかどうかというのは、彼女言い方をすれば、垂水高校でよかったというような感じだと思う。価値観というのは違うが大学は考える場所ですから、そこで考えてもらえばいい。そういうのが出来るのが垂水高校ではと思う。垂水高校の存続に対しては、出来ることをいっぱい言うし、出来ないことは言いません。

〇議長：ちょうど５時になったので、以上で本日の協議を終了したい。振興対策協議会に続いての会であったが、後日でも結構ですので、本日のいろんな内容について、質問やご意見があったら頂きたい。本日は長時間のご協議ありがとうございました。

●倉岡課長：それでは最後に肥後教育長に閉会のあいさつをお願いします。

●肥後教育長：今日は垂水市の地区検討会、第１回目であった。また県教委から高校教育課の方、また教育事務所からもおいでいただいた。この地区検討会は、垂水市を皮切りにスタートしたが、それほど垂水市が垂水高校の事について真剣に考えているという表れであり、尾脇市長以下みんなでどうあればいいのかとこれから検討していきたいと思っている。今日は一方的な説明に終わるのかと思っていたが、色々なご意見も頂いた。これから２回３回と垂水市にあります魅力ある垂水高校づくり検討会議でも、色々な意見を検討しまして、県教委の方にあげられる報告書をつくっていただきたいと思う。何回も出てきましたが、垂水中央中から垂水高校に行く生徒が４分の１しかいないという現実、これをどうするかということが非常に大事である。子供達が行きたいという高校にしていくにはどうすればいいのかということだろうと思います。アンケートにもありましたが、中学生が高校を選ぶときは、イメージというのが１位に上げられている。ですから垂水高校、イメージアップをどうすればいいのかというのも柱のトップになっているおり、そのために具体的なものをみんなで考えて行きたいと思っている。子供達が行きたい、そして親の方が行かせたいという方法を検討していかなければ、この会をやった意味がないので、これから委員の皆様方よろしくお願いをしたいと思っている。